
進むべき道

藍図乃々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
進むべき道

【Nコード】
N7871A

【作者名】
藍図乃々

【あらすじ】
いまどきの高校生の涼子は仲間と4人で楽しく過ごしている…みんな恋に遊びに大忙し。

第1話

いつものファミレスでいつもの友達とたわいもない話で盛り上がる。店員からの冷たい目線は気にせずバカ騒ぎしている。

私は今が青春真っ盛りのはずの女子高生。そして一緒にバカ騒ぎできる3人の友：杏、カオル、紗季そして私、涼子。友達と遊ぶのは楽しいけど：なんだろう？この物足りなさ：。

「涼子っ！　ボーッとしすぎ！」

「ああ〜ごめんごめん」　紗季はなんだか今日すごく張り切ってしゃべっている：。塾講師の彼氏とうまくいってるらしい。紗季は頭が良くて顔立ちもキレイ。だから学校ではマドンナ的な存在なのだ。塾講師の彼とはもうすぐ1年になるらしい：なのにまだ喧嘩は無いどころかラブラブ。その時、杏のケータイが鳴った：

「ごめ〜ん！あたし帰らなきゃっ。ダーリンが待ってるの」

「杏さあ、ダーリンって言うのそろそろやめたら？」

「ん〜それは無理。だって愛してるもん」　「はいはい。」

勝手に言ってな。」

杏も今ラブラブなのだ。社会人のカレと。

「場所変える？」

3人だし：紗季どこ行きたい？」

「ごめん！あたし今日、予備校の日だったの、だから行くねっ」

「あつ、そっか。ちゃんと勉強すんだぞっ」

「わかってるよ。じゃあねえ」

結局、2人になってしまった。

「カオルどーしよっかあ」

「ん〜とりあえず家来る？」

「まじで？行

く行く。カオルの家大好き」

なぜだかいつもカオルと2人の時はカオルの家と決まっている。

第2話

いつもと変わらないカオルの家…

「やっぱカオ

ルの家が1番落ち着くわあ」

「なんだそれっ?!」

カオルとは幼なじみで幼稚園からずっと一緒、だから自分の家みたいにくつろげる。女の子って感じのカオルの部屋…写真が何枚か飾られている。その中には彼氏と幸せそうなカオルがいた。

「最近、カレとはどうなの?」

「ん〜普通。。」

カオルの意外な返事に驚いた…。

カオルは私の知り合いでもある真斗と付き合っている。もう3年くらいになる…そんなになく付き合っているならちよっとくらい冷めた反応でもおかしくないのかもしれないがカオルの場合は違う。だって今までずっと幸せそうに話してくれてたのに…。

「真斗となんかあったの? 喧嘩した?」

「ううん。真斗は相変わらず優しいし大切にしてくれてるよ。」

「じゃあなんで?」 「真斗の事は好きだよ。でも……」

「真斗にひどいことされたの? そんなことしてんならあたしが文句言いに行ってくる。」

私は恋愛でこんなに悩んでるカオルを初めて見た。あたしがかなりキレ気味で立ち上がる… 「違うの…真斗のせいじゃない」

「え? どーゆーこと?」

返事が無い…

「ねえ、カオ

…ル?」

カオルは下を向いて涙を流していた。「あたし…真斗と話してる時もキスしてる時も…先生の事考えちゃう。」

「先生って?」

「西田先生……」

「はっ?!あの国語の?」

「そう。」

西田先生は私達の学校の国語教師。確かに若くて最初は人気があった。しかし女に興味ある素振りを全く見せず、みんなの人氣がどんどん引いていき騒がれなくなった。

カオルも最初

は冗談で騒いでいた、もちろん私も。

「まじで…なんで?カオル好き…なの?」「わかんない。でも考えちゃうんだよ。」

カオルの目は真っ赤で可哀相なくらい涙が溢れていた

私はなんて声をかけたらいいかわからずただ抱き締めた。カオルはあたしの胸でずっと泣いていた。

第3話

カオルのケータイが鳴った……
「カオル？ ケータイ鳴ってる」

「真斗：しかも電話…」

真斗用の着音らしく画面を見ずに答えた。
「出ないの？」

シカトする事になっちゃうよ…」

「真斗の声：聞くのつらいの」

「じゃああたしでるよ？」

カオルはあたしの胸で泣きながら頷いた。
「はい、カオルのケータイですが」
『は？ 涼子？ なんでお前なんだよ』

「なにそれ、ひどすぎ」
変にテンションあげてたから気付かれないかヒヤヒヤしながら話していた。
『カオルは？』
「あたしが誘拐した」

『は？ お前、冗談ばっか言ってねえで早く代われ』 真斗は明らかにイラついていた。でも今、カオルに代われるわけ無い。真斗に聞こえないようにカオルに話し掛けた。

「カオル、真斗と話してきていい？」

「何を？」

「真斗の話聞いてくる。カオルの事は言わないから」
「わかった。行ってきた」

カオルはちよつと心配してたけどこのまま電話を切れるわけ無い。

「真斗？ 話あるから学校の近くの公園来て」

『えっ…ああわかったよ』
「カオル、行ってくるね」

「うん。迷惑かけてごめんね」

「迷惑なんかじゃないよカオルの事だもん」
そう言ってカオルの家を出た。公園に着くと落ち込んだ様子の真斗がいた。「おゝ暗いねえ真斗君」

「うるせえ。で、なんだよ話って」

「あんたの事聞きたくて」

「は？また冗談か？」

「違うよ。本気。カオルとうまくいってないの？」

「そんなのカオルに聞いてんだろ」

「だからあんたの事が聞きたいって言ったじゃん」

「…実はさあ、最近カオル俺といっても上の空っつーか…カオルなんか言ってなかった？」

「んゝ特になんも言ってなかったよ」真斗に嘘はつきたくなかったが今はしよーがない。「じゃあ何で電話お前がでたの？ほんとは何かあんだろ」

「いやいや、ただカオルと仕組んだだけ」

「はあ？わけわかんねえ」「まっ、気にしないで。じゃっ！」

早口になってしまったかもしれない。けどカオルが心配だったし真斗の気持ちも教えてあげたかった。

第4話

早足でカオルの家に向かった。

「カオル」。

帰ったよ」

部屋に入ると放心状態で小さく丸まっているカオルがいた。

「真斗と話してきた」

真斗という言葉に反応した…。

「真斗なんだ

って？」

「カオルが自分といても上の空だって。」

また泣いてしまうだろうか…でもカオルのためだと決心して続けた。
「カオルはさあ頭では真斗が好きって思おうとしてるんだろうけど本能的に西田を求めているんじゃない？」

「…そんなことないよっ。だって…真斗の事……」

「じゃあなんでさっきの電話出なかったの？西田への気持ちが大きくなったからじゃないの？」

やっぱり泣き始めてしまった…。

「カオル、よ

く聞いて。私は今日どっかに決めろって言ってるわけじゃない。ただ自分の気持ちに嘘ついて自分を苦しめるのはやめてほしいの。」
カオルは泣きながら頷いた。それから何も言わず、ただ胸を貸してあげた。しばらくするとカオルは落ち着いて話始めた。

「涼子ありがとう…涼子が居てくれて良かった。」

「やだあ、照れるじゃん」

私はちよつとでもカオルの笑顔みたくてふざけてみた。でもこんな状況で笑える訳もなくひきつった笑顔だった。「あたしも帰るね。明日も学校だし。ちゃんと学校来るんだよ!!」

「わかってる。涼子も遅刻しちゃダメだよ」

私は自分の家へ足を向けた。今日のカオルを思い出しながら…。カオルはあんまり感情を表に出すほうではない。むしろ冷静な子だ。みんなからはクールでかっこいいなんて言われている。

そのカオルが…恋の力とはすごいものだ。あんなに人を変える力があるのか。

ケータイが鳴った…カオルかと思っ
て慌ててケータイを見ると…杏からメールだった「杏からだ。なん
だろう」

《やっほ♪相変わらずラブラブな杏ちゃんだよ！早速だけど本題に入ります。涼子さあ彼氏とか作らないのお？涼子のプリクラみて会
いたいって人がいるんだけどどう？このメール見たら即返信！》

なんだこの子…。彼氏かあそーいえば考えてなかった
なあ。でも今はそんな気分じゃないし。

《かなりキチ
ガイな杏ちゃんへ♪その話はまた今度にして。じゃ明日ねえ》

かなり一方的だけどしかたないそんな状況じゃないし。自分の部屋
にもどるとそのままベットへ…。

第5話

気付いたら朝：昨日、帰ってきてすぐ寝ちゃったんだ。

とりあえずお風呂へ：カオルちゃんと来るかな？来るよね、信じるしかないか。

ケータイを見ると杏から怒りメールが来てた。あたしがノリ悪いとダメ出し：学校で謝るとして早く行かなきゃ。ドアを開けると：雨？！さっきまで降ってなかったのに。しかたなく歩いていくことにした。ダラダラ歩いていた時、後ろからすごいスピードで車が通り過ぎた。おかげで濡れた。私はかなり不機嫌で帰ろうかとも思ったけどそこはカオルのために思い止まった。歩いているときあたしを濡らした車が：憎たらしいと思いつつ通り過ぎようとした

「涼子っ！！」

車の中から顔を出したのは杏だった。

オマエかあた

しを不機嫌にしたのは：。その事実を知ったのでシカトした。

「涼子ってば！シカトは良くないぞ。ねえねえ杏のダーリン紹介してあげる」

そーいえば、話には聞いていたが見たことは無かったので車を覗き込んだ。そこにはイケメン2人。しかも片方、外国人じゃん！

「杏、彼氏2人も？」

「やだなあ、1人だよ。ほらジョンだよ」

と、外国人と熱いキス。朝から：。「さすが杏だ

ね。国際的だわあ」

「でしょー！やっとわかったか。んでもう1人が聡くん。昨日メールで言った人だよ」

昨日？：あっ、私に会いた

いって人か。物好きだなあ

「初めまして涼子ちゃん」

「あっ、初めまして：」

「聡って呼んでいいから」

「あ：はい。」この人のノリは無理だろ。早く学校いこ。

何言われてもシカトし続けやっど学校に着いた。杏は私服だったから来ないのかな？教室に向かう時、西田を見かけた。背が高くていつものようにスーツで決めている。ずっと見ていたら目が合ってしまった。私は慌ててそらして教室に入った。するとカオルがいた。「カオルくちやんと来たんだ？えらいぞお」

「もお、涼子遅いから来ないかと思った」

「ごめんごめん」

若干、声が枯れてた。まあ昨日あんだだけ泣いたらそうかもしれない。

そのとき紗季が走ってきた

「ねえ聞いて！暁仁がね」

「ちょ、ちょっと待って。暁仁ってだれ？」

「え？言ってなかったっけ？私のカレ。」

杏もだけど紗

季の彼氏の名前も聞いたことなかった。

「それで？」

「そう！暁仁がねあたしの事愛してくれたのお」

「は？今までラブラブなんじゃなかったっけ？」

「違くてえ」

とニヤつきながら首筋を見せてきた。

「そっちかあ。よかったね」

「うん。もう幸せすぎる」

「ああ、幸せ病だわ」

2人で呆れてた。すると紗季のケータイが鳴った。紗季はうれしそうに走っていった。授業中、カオルの方を見るとちゃんと勉強していた。あたしも集中しなきゃ。昼休み、カオルとお弁当を食べた。

「カオル、気分どう？」

「ん？昨日よりは全然落ち着いてるよ」

「そっか。よかった。」

「それでさあ、真斗と話そうと思って」

「え？急じゃん」

「放課後、涼子も来てくれない？」

「ええ！…いいけど」

「じゃ、よろしく」

「あっ！次の授業、西田じゃん」

「うん。どーしよ、緊張する」

「いやいや、緊張するってあなた…」

第6話

チャイムが鳴った：ついに西田の登場だ。

あたしにはちっともおもしろくない授業もカオルには夢のような時間なのかもしれない。

ラしてる。

そして西田を見るとまた目があつた。や

ばっ！焦って俯いた。

すると終わりを告げるチャ

イムが鳴った。

救われたあゝチャイム万歳と喜んでい

と、「おい遠田涼子、放課後俺のどこ来い」フルネームか

よっ！

ってか呼び出し？西田め何してくれちゃうわけ、放課

後はカオルの大事な用があるのに：

「カオルゝ西田に呼び出しされたあ」

「まじで？いいなあ」

「いやいや良くないから。真斗と話すの着いていってあげられないよ」

「大丈夫でも一緒に帰ろ」

「もちろん！」

そして私は西田を探しに職員室へカオルは教室で真斗と話らしい。

職員室の前には職員室に入るときの注意が書いてある。

あたしはそれに書いてある通りに入った。

「失礼しまあす」

「相変わらずだるそうだな涼子。」

「あっ！担任。ちよっと聞いてよお、西田先生に呼び出された」

「なんか悪いことしたのかあ？」

「してないよっ！で、西田先生どこ？」

「んゝ国語準備室とかじゃないか？」

「ハッキリしないのかよっ！全く担任はテキトーだな。まっそこがいいトコだけどね」

「オマエに誉められてもうれしくない」

「はいはい。照れんなって！じゃあね担任。」

国語準備室とやらに向かう。って国語準備室はどこ？迷子じゃん…
とりあえず人に聞こ。前から歩いてきた男の子に話し掛けた

「あの、国語準備室ってどこですか？」

「えっ？俺？」

急に話し掛けられてびっくりしたらしい。

「そう。」

「えっと、真っすぐ行って右に曲がるとすぐだよ」

「ありがとう！」言われたとおりに行くと…あった！やっとなつた
よ。

第7話

着いたはいいいけどノックしたほうがいいのか：あれ、もしかしてあたし緊張してる？！いや、それはない。気を取り直してノックした返事が無い：むかついたのでノックし続けた。 「私を呼び出しといていないなんて何様よ？！」

「おい、あんま叩くなよ、壊れる」

「え？なんで後ろにいるの？」

「俺も人間なんで動くんですけど」

「あ、そっか。で何の用ですか？」

「ま、その前に中入れよ」

言われるがままに入ると、キレイに整頓された部屋が出てきた。

「うわあ、すごい！部屋キレイ、ソファもある！」

「おい、騒ぐなよ」

「キレイ好きなんだあ」

「まあな。そんなことよりも最近のお前の態度おかしいぞ」

「は？そんなことないよ」

「じゃあ、なんで目を慌ててそらすんだ？」

「いや：それはその：まあ特に理由なんて無いよ」その時、私はひらめいた！カオルのために西田情報をゲットしよう
「ねえ、先生は結婚してるの？」

「急になんだよっ」

「どうなの？」

「してないよ。」

「彼女は？」

「言わない。」

「なんでよお！！」

「わかったから、もう帰っていいよ」

「なんだよ、自分から呼んどいて」

ブツブツ言い

ながら教室に帰った。そーいえばカオルはこの教室で話してんだ
ろう? 「涼子っ! やっと終わったか」

「カオル!? もう話し終わったの?」

「うん。真斗にちゃんとはなした」

「先生のことも?」

「ううん。それは話してない。でも真斗もきつとわかってくれたと
思う。」

「そっか。そーだっ! 西田今、国語準備室にひとりだよっ! 行って
くれば?」

「え? まじ? でも緊張しちゃってむり」

「チャンスは掴まなきゃ」

「そっかあ。カオルは?」

「あたしは先帰るよ。」

「わかった。じゃあ行ってくる」

第8話

カオルを見送った：これで良かったのかわからない。

真斗と何を話したかはわからないけどカオルが西田しか目に入っていないのは確か：。

なんかスッキリしない気持ちのままなんとなく歩いていたら図書室に来てしまった。なんで？わけもわからず吸い込まれるように中へ入った。そのままウロウロしていると窓越しにカオルが見えた。西田と話してる：うまくいったかなあ？　ここからだとあまり見えない：。「涼子：？」

「えっ？」

振りかえると真斗がいた。

「真斗、どうしたの？こんなところで」

「お前こそ図書室なんて柄じゃないだろ」

「まあそうだけど」

「あのさ、カオルから聞いた？」

「ああ今日話した事？」

「そう。」

真斗はちよつと落ち込んでるみたいだった。こんな状態の真斗にカオルが西田といるところなんて見せられない：

「ねえ、場所かえない？」

「え？」

「だって、ここ図書室だからうるさくすると怒られるし：ねっ？」

「ああいいよ」

そう言ってカオル達が見えない教室へ行った。

真斗が先に口

を開いた。　「俺：フラれちゃった」

「そっか。」

「もう俺の事、前みたいが好きでいられないって：」

「……」

何も言えなかった。なんて声をかければいいかわからない。

「3年だぜ：3年も付き合ってたのに何で急に：」

「3年も経ってたら気持ちが変わるかもしれないじゃん。」

「でも、急にだよ?!それまでは付き合い始めと同じだったのに：」

「真斗、カオルの事大好きだったんだね」

「そりゃ好きだよ……。なあ涼子、俺の何がいけなかったんだろう?」

「何がって：カオルに聞かなかったの?」

「聞けねえよ

：なんか信じられないってゆーかショックで頭真っ白になっちゃってさあ」

「そっかあ。あたしが思うに真斗が悪いわけじゃないと思うよ。」

「え?じゃあカオルが悪いってこと?」

「いや、そーゆーことじゃないよ。何ていったらいいかわかんないけど、時の流れっていうか：」

「何言ってるかわかんねえよ。ハッキリ言えよ。」

声が震えてた。真斗は泣いてるのか?

「だから誰か

が悪いって話じゃないって事」

「じゃあ何が原因なんだよっ」「それはカオルに聞くしかないんじゃない?」

「そーだよな。怒鳴ってごめん。。」

「いいよ。そんだけ真斗が真剣だったって事じゃん」

「：うん。俺：帰るね」

「気を付けて。」

真斗が学校を出るのを見届けて私も帰る事にした：。

第9話（前書き）

今回はカオル視点です。

第9話

「勢いで行くって言ったけど…何話せばいいかわかんない。どうしよう…。でも、せっかく涼子がチャンスくれたんだからがんばるしかない。」

自分に言い聞かせながら国語準備室へ向かった。 ドアをノックすると中から西田先生がでてきた。 「おっ、どうした？」

「え…えっと、涼子は？」

何も考えてなかったので、とっさに嘘をついた。

「もう帰ったぞ」

「あっ、そうですか…」 「会わなかったのか？」

「あ、はい。あの…」

「ん？なんだ？」

「先生って結婚してるんですか?!」

先生が急に笑いだした。 私はキョトンとしたまま

「遠田にも同じ事聞かれたよ。」

「え？涼子に？」

「うん。」

「そーですか…」

涼子…そんな事言ってなかった。。

「してないよ。」

結婚」

「え?…ああそうなんですか。」

「なんだあ？」

ふたりして俺に興味あんのかあ？」

「涼子はわからないけど、私はあります!!」

先生は冗談っぽく言ってたけど私は真剣に答えた。 先生、驚いてるかと思ひ顔を見たら、笑っていた。 「そっかそっか。そりゃ嬉しいなあ。」

「え?。」

今、嬉しいって言った……

「じゃあもつと先生の事教えてください！」

「いいよ」

先生の優しい笑顔に失神寸前の私……

「あぶねっ！」

私が倒れそうになったところを先生が支えてくれた。私の心臓は今にも破裂しそうなくらいドキドキしてる

「大丈夫か？とりあえず中で休んでいけよ」

言われるまま中に入って、ソファにすわった。

「待ってろ、今なんか飲み物かって来てやるから」

「えっ？いいですよっそんな悪いですから」

「遠慮すんなってちゃんと休んでろよ」

部屋にひとり残された。何すればいいかわからず、ぼーっとしてるとだんだん意識が遠くなっていた……

「ん、ここ……あたし寝ちゃったんだ！」

部屋を見渡すと先生が机に向かって寝ていた。 「寝顔……かわいい。」

私に掛けてくれていた上着を先生にかけてあげてついでに頬にキスした。 キスしてからすごい恥ずかしくなり、慌てて部屋を出てトイレに行った。 「何やってんだろ、私」

顔から火が出そうなくらい恥ずかしくなった。 とりあえず帰ろうと思ったのだがカバンを準備室に置いてきてしまった事に気が付き、戻ることにした。静かにドアを開け入っていくと先生はソファに座っていた。 「あつ、先生起きたんですか？」

「ああ……まあね。それよりも大丈夫なのか？」

「はい。あのあたし帰ります。どうもありがとうございました。」
部屋を出ようとしたとき、先生に後ろから抱き締められた。

「え？先生……？」

「さっきは驚かせられたからお返し」

「さっきって？」

「俺に上着かけてくれたついでに……」

「起きてたんですか?!」

「実は…寝た振りしてた。お前が起きたときの物音で起きたんだけど」

「ええ!」

「いやいや、意外と積極的だねえ。」

「あ…あの、ごめんなさい!!」

「謝らなくていいよ」

「でも……」

「その代わり俺の言うこと聞いて」
先生は何か企
んでる笑顔を見せた。
「…なんですか?」

「俺が呼んだときにすぐ来て」

「え?」

「大丈夫、変なときには呼ばないから」

「あ、はい」

「じゃあ呼び出す用にケータイ番号教えて」

「え?」

「番号。しらなきゃ呼びだせないでしょ?」

「あ、はい」

ケータイをカバンから出して先生に見せた。

「よしっ、おっけい。ありがとう。」

「先生は教えてくれないんですか?」
「俺から電話
きてからのお楽しみ」

「先生って意外と子供っぽいんですね」

「そうか? もう暗いから送ってやるよ」

「えっ?! 大丈夫です。ひとりで帰れるんでっ」

「遠慮すんなよっ」

「じゃ、お願いします」

先生の車に乗って走りだした。私は二人だけの空間を満喫していた。
ちらっと先生の方を見た。運転してる横顔もかっこよくてつい見と

れてしまった

「ん？俺に惚れたか？」

「…はい」

「そっかそっか」

「先生は…私の事どう思いますか？」

「うゝん、素直で可愛いと思うよ」

「嬉しい…」

「よし、着いたぞ」

「あつ、ありがとうございました」

車を降りようとした時、手を掴まれた。

「え？先生？」

「カオル…」

「ええゝ！先生、顔近い」

「ハハッ！やっぱおもしろいなあ、カオル」

「からかったんですか？」

「ごめんごめん」「もう、先生ひどい」

「また明日なあ」

車から降りて部屋に戻った…。でもテンション上がりすぎて寝れそうにない…。

第10話

ケータイが鳴ってる……目覚ましのアラームだ。

怠い体を起こして、リビングに向かう。

テーブルの上には朝食が用意されている。

母さんは何時

に起きてるわけ?! そんな母さんに感謝しつつ昨日の真斗の事でな
んだかすっきりしない目覚め方をしてしまった。 時間がないの

で家を出た。

教室に着くとカオルが走っ

てきた。

「涼子! ちゃんと来て! 聞いて」

このテンションを見たら分からない訳ない。と思いながら屋上へ連
れていかれた…。

ここはテンションをあわせてあげよう。

「なにになに?」

!

「あのね! 昨日、先生とね…」

カオルは止まる事無く延々と昨日の出来事を話続けた。 おかげで今
日、一時間も授業を受けずに放課後になってしまった。

その時、カオルのケータイが鳴った。

「誰だろう…」

もしもし?

『カオルか? お前、今日授業どうした?』

「えっ? 先生

? 授業は…さぼっちゃった。」

『それじゃダメだろ。』 「ごめんなさあい」

『国語準備室来いよ』 「はいっ! すぐ行きます」

電話を切ったカオルはすごい笑顔だった。

「ごめん、涼

子。あたし行くね」

「あ…うん。」

カオルは走って西田の所へ行ってしまった。

真斗の事はも

う忘れたのだろうか…。自分がきっかけを作ったのだが、よかった
のかな…。カオルに不信感を感じつつ帰ることにした。 ケ

ータイを見ると杏から何回も電話が来ていた…。 なんだろう…?

杏に電話かけるとすぐに出た。

「もしもし？涼子？」 「うん。電話した？」

『したよお！何回も』 「ごめんね。んで何？」

『あつ、そうそう今から会えない？』 「え？いい

けど」

『学校で言おうとしたらいないんだもん』 「んゝカオルの話聞いてたら放課後になっちゃって」

『はあ？なんだそれ。まあいいや。だから今から会おう？』

「いいよ。あたし今、学校なんだけど」

『あたしも！じゃあ下駄箱で待ってるね』 「わかった。」

下駄箱に行くと杏がいた。

「おお涼子。早いじゃん」

「杏の方が早いじゃん！」

「まあね。」

「それで？なんかあったの？」 「出た」

「え？なにが？」

「そーやっていつも相談に乗る側に回っちゃうんだから。」

「そうかな。」

「そうだよっ！自分の事はどうなの？」

「自分の事って？」

「恋だよ。最近、恋してんの？」

「え…？してないかも」

「やっぱり。」

「相談に乗るのはいいけど、ちょっとは自分の事考えなよ。」

「んゝそうだよねえ」

「パツとしない返事だなあゝ」

「なんか杏、姉さんって感じだね。」

「何言ってるの。話をはぐらかさないで」

「わかったから場所変えようよ。下駄箱で話してるの嫌じゃん」 「いいよ。じゃあ、家くる？」

「いいの？」

「もちろん！」

「杏の家、初めて行く。」

「だろうね。あんまり人呼ばないから」

「なんで？」

「んゝ外で遊んだほうが楽しいじゃん。でも今日は特別。」

「嬉しいなあゝ特別だなんて」

「ちょっと待ってて、迎えにきてもらうから。」

「誰に？」 「ダーリンに」

「杏の彼氏、社会人じゃないの？」

「そうだよ。たまたま今日休みなんだって」

「え？せっかくの休みなのに遊ばないの？」

「うん。涼子の方が大事だもん」

「……ええ？そんなこと言っているの？」

「うん！お互い友達は大切にするって決めてるから」

「へえゝ」

話してるうちに迎えの車が来た。

「ジョン、家

までよろしく！！」私はジョンに軽く会釈して車に乗った。

10分くらいすると車が止まった。

「涼

子着いたよ。」

「あ、うん」

ジョンにお礼を言って杏の部屋に入った。

第11話

「ようこそ！ 杏のお城へ」

「一人暮らしなの？！」

そこには外国風なインテリアでキレイに整頓されていた。

「そうだよ」

「すごい！」

「そう？ まあその辺すわってて」

私はソファに座って周りを見回していた。

杏は紅茶を持

って向かいに座った。

「紅茶でよかった？」

「うん。なんか杏…大人あって感じ」

「えっ？ そんな事ないよ。そんなことよりさっきの続き。」

「あ、うん。」

「そんで？ 好きな人いないの？」

「好きな人かあ。いないかな。」

「だったらさあ聡くんどうよ？」

「聡くん？…あああの人か。私、あの人のノリが無理だわ。」

「この前みたいな軽い感じの？」

「そう。ちょっと引いた」「そっかあ。でもいつもはあんなノリじゃないんだよ。涼子のイメージで無理してたんだと思う。あん時、涼子シカトしたでしょ？ あの後すごい落ち込んでたんだから」

「え？ そーなの？ ってかあたしってそんなに軽いイメージなわけ？」

「涼子は軽いイメージじゃないよ。聡くんさあ真面目だからがんばっちゃうんだよ」

「ふーん。」

「疑ってるなあ？」

「別にそんなことないよ」

「今度、バスケの試合あるの。見に行かない？」

「え？ 聡くん

バスケやってるの？」

「うん。ジョンと同じチームでね、社会人チーム
なんだけどさあ。かっこいいよっ」

「うん…。」

「あっ！今日、練習日だと思うから見にいこ」

「あ、うん」

「よしっ！じゃあ行こう」

杏の家を後にした。電車を乗り継ぎ30分くらいで体育館についた。2人で気付かれないように入っていった。

「涼子！あの今ボール持つてる人、聡くんだよ」

杏が指さすほうを見ると、この前会った感じとはまったく違う真剣な表情で、正直ドキッとした。「ねっ！！かっこいいでしょ？」

「あ…うん」

顔に出さないようにしたのに杏にはバレてた。休憩の時間な

のかみんな休んでいる…と、ジョンが杏と私に気付いて聡君を呼んで走ってきた。杏とジョンは相変わらず、イチヤイチヤ

していた。私がどうしたらいいかわからなくしていると聡くんから話し掛けてくれた。「見に来てくれたんだ」

「あ…はい。」

この間とは違うちよつとかっこいいかも

…。「なんかこの前は不愉快な思いさせちゃったみたいでごめんね」

「いえ、そんな事ないですよ」

「もうすぐ練習終わるから、待っててくれる？」

「はい。」

また練習が始まった。杏が嬉しそうに来了。「聡くんとい

い感じだったじゃん」

「そんなことないよ…！」

「ふーん。まあいけどお」

杏の悪戯な笑みに困りながら練習を見ていた。練習が終わってしばらくすると着替えた2人が来了。シャンプーのいい香りがする。

「待っててくれてありがとね。」

「いえ…。おつかれさまです」

「おう。これからあのバカップルとメシ行くんだけど行かない？」

「杏達と？」

「そう。」

「あ…行きます！」

聡くんの車に乗ってファミレスに向かった。

第12話

車でちょっと行ったところにファミレスはあった。みんなそれぞれ食べていると杏が何かひらめいたみたいに口を開いた。

「これから杏の部屋みんなで来ない？ねっ?! 聡くん来るでしょ？」

「え: ああ、俺は別にいいけど」

「涼子もくるでしょ？」

「あ、うん:」

杏の勢いに押されてついうなずいてしまった。 杏とジョンは

もういく気満々で二人にひっぱられながら杏の家に向かった。部屋に入って私と聡くんはソファに腰掛けていた。 杏とジョンは: 相変わらずキッチンでイチヤイチャしている。そんな二人に呆れて俯いていると聡くんが声をかけてくれた。 「気分でも悪い？」

「いえ、そんな事ないですよ。」

「そう。それよりさあ敬語使わなくていいよ。」

「あ、はい。」

すると杏がお菓子とお酒を持ってきた。 「このお酒ね

えジョンのママが作ったんだよ」

そう言いながらジョンと二人で飲みながら盛り上がっていた。

私も勧められたが気乗りしないので断った。

聡くんも飲んでないみたい

「聡くんは飲まないんですか？」

「うん。車だからさ。敬語使ってんじゃん」

「あつ、ごめんなさい」

「いいよ。そのうち慣れてくれれば。それよりさあ、外で話さない?」

「え?」

「あの二人もう酔っ払ってるし、涼子ちゃんのことと知りたいし」

「いいよ。」

盛り上がっている二人を置いて外に出た。聡くんと並んで段差にすわった。 「涼子ちゃんさあ俺のこと嫌い？」

「え？何んですか急に…」

「いや、最初会ったときに迷惑そうな顔してたから」

「あの時は、苦手なタイプだと思ってたけど今日会って見直した。」

「そっか。よかった。…それでさあ、もし嫌じゃなかったら俺と付き合ってくれない？」

「え…でも聡くんの事あんまり知らないし」「これからお互いを知って俺のこと好きになってほしい。」

聡くんからの急な話に戸惑った。けど今日話して、バスケしてる姿見て好印象を持ったのは確か。 「やっぱ嫌だよな…」

「そんなことないよ。好きになるのはこれからでいいの？」

「うん。絶対、俺に惚れさせるよ！」

「なにその自信?!」

「なんでだろ？でもさあ、ほんとありがとう」

聡くんの目がすごく優しくかった。

「部屋もどろっか」わけもわからず部屋にもどると中には例のバカップルがかなり二人の世界で入るのが気まずかった。 「部屋

入りにくいね…」

「…だな。じゃあ俺の部屋来る？」

「え？」

「そんな驚かなくても…。まあなんもしないから安心しなよ。」

「余計あやしいんですけどお。」

「大事な涼子ちゃんに何かあったら大変じゃん」

「へえ…」

正直嬉しかった。でも照れ隠しでそっけなく返事した

「ああ！…疑ってるんだろお？」

「そんなことないけど」

「じゃあ行こうぜ」

「…うん」

バレてなかったか心配だったけど…まあいいか。
走りだした。

再び車に乗り

第13話

車の中はラジオなのか、匂な音楽が流れていた。私は窓を開け夜風を受けながらウトウトしていた。

するとマンシヨンの前で車が止まった。

「ついたよ。」

車を降りて部屋へ入った。そこは生活感のないきれいな部屋だった。

「どうぞ、入って」

「おじゃまします」

「風呂入る？」

「え?!」

「いや変な意味じゃなくて眠そうだったから」

「あ、入ります」

そう言ってお風呂に向かい入っていった。

お風呂を出るとジャージとTシャツが置いてあった。それを来てリビングへ行くと聡くんはテレビを見ていた。 「おっ、出て

きたか。じゃあ俺も入ってこよ」

「先は入っちゃってごめんね。」

「そんなことより風呂上がりで濡れ髪の涼子ちゃん、かなり色っぽい」

聡くんはからかいながらお風呂に入っていた。 私はひとり照れていた。 なんか落ち着かなくてとりあえずテレビを見ていた。

またウトウトしてきた。 後ろに気配を感じ振り替えるとお風呂上がりの聡くんがいた。

「涼子ちゃんもう眠い？」

「そんなことはないよ」

「じゃあ隣、失礼」

そう言っ私の隣にすわった。すごいドキドキしてしまう。

「ねえ、涼子ってよんでいい？」

「あ、いいよ」

「じゃ呼ばさせていただきます！俺も“くん”なしで呼んでもらいたいなあ」

「わ…わかったよ。」聡くん…いや、聡は満足そうな笑顔で私もつられて笑顔になってしまった。その時、聡のケータイが鳴った。

「あ、電話だ…ちよつとごめんね」

電話に出ながら外へ行ってしまった。私はやることなく暇してるうちに眠ってしまった。

遠い意識のな

か聡の顔が見える……。浮いてる…?!

「えっ?!」

思わず声が出てしまった。

「起こしちゃった?」

「あ、あたしなんで持ち上げられてるの?」

そう、私は聡にお姫さま抱っこの状態で運ばれていた

「涼子がソファで寝ちゃってたから風邪引くじゃん」

ベッドにそっと下ろしてくれた。そして聡が歩きだした。「どこ

いくの?」

とっさに言ったので自分でも訳が分からなかった。

「ん?すぐ戻ってくるよ。涼子のために」

またからかうように笑いながら部屋を出ていってしまった。聡がいないだけでなぜかすごくさみしくなった。もしかすると好きになりはじめてるのかもしれない。そんなことを思いつつベッドに潜り込んでいると、聡が隣に入ってきた。心臓が飛び出そうなくらいドキドキした。でもなぜか安心した。

「涼子ただいま」

「あ、おかえり」

「淋しい思いさせてごめんね。」

バレてたらしい…。私は聡に背を向けていた。

聡が隣にいると思うと恥ずかしくてまともに顔が見れない。しかし…聡が後ろから抱き締めてくれた。すごいドキドキするけど、どこか心地いい。

「涼子…こっちむいて」

「無理無理！」

「なんでさ？」

「恥ずかしい…」

「かわいいなあ」

「バカ…」

聡の手が私の肩に添えられて抵抗する暇もなく向き合う形になってしまった。

聡の顔を見ると彼も私を見ていた。

聡の顔が近づいてきてキスをした。

すごく優しくて気持ちいい。こんなキスは初めてだった。今までつきあってきた人とキスもしてきたが聡のキスは比べものにならないかった。

「涼子、その顔すごい色っぽい…」

「え?？」

「襲っちゃうよ？」

「は?! 何言ってるの? 聡・・・?」

「ウソウソ。そんな事する分けないじゃん。部屋くるとき約束したろ」

「もう! すぐからかうんだから!!」

聡とするのが嫌って訳ではなかった・・・ただ、私は経験がなかったから戸惑ってしまった。そんな私の気持ちをわかってなのか、聡は私を抱きしめた状態のままいてくれた。私はなぜかそんな聡が愛おしく思えたので、自分からキスしに行った。

「おっ! なんだ俺が欲しくなったか？」

「いや、そーゆー訳じゃない・・・」

「わけわかんないなあ・・・でもうれしいぞ」

ふざけあいながら自然と眠りについていった。たくさんキスをした・・・

第14話

ケータイが鳴ってる……。私のだ。

隣には聡が寝ている。ケータイを見ると杏から電話だった。聡を起こさないようにそっとベッドから出てリビングへ向かい電話に出た。
「もしもし？」

『涼子？昨日はごめんね。つい飲み過ぎちゃってさあ』

「ううん。大丈夫だよ。」

『今、どこにいるの？』

「・・・聡の・・・家」

『ええー！！』

思った通りの反応だった。『聡君の？！急展開じゃん。しかも呼び捨てって・・・もしかしてつきあっちゃった？？』

「・・・うん。わかる？？」

『まじで？だと思ったよお』

「ウソばかり。でたらめにいったのがあただけでしょ？」

『バレたか・・・。それよりさあ、カオルから電話あったよ。涼子のケータイがつかないって。』

「まじで？」

『どうせ涼子に授業さぼらせてまで聞かせた話じゃないのお？』

「そーゆー事言わないの。」

『でもさあ、カオル最近ちよつと自己チューなんじゃないの？？』

「んー最近ちよつと変わってきた気がするけど、そこまで言わなくても・・・」

『うーん、ちよつと言いすぎたかも。』

「わざわざ電話までしてきてくれてありがとう」

『いいえ。今日は学校休みだし、聡くんも休みだと思うしラブラブしてなよ』

「もう！からかうなっ」

『ごめんごめん。じゃあねえ』電話を切って改めて考えると恥ずかしくなった。私は聡と付き合うことになってキスマでした…杏の言う通りすごい急展開。まだ眠かったからベッドに戻る事にした。聡はまだ寝てるみたいだからそつと中に入っていった…すると聡が抱きついてきた。寝呆けてるのかと思ひ離れようとした

「涼子：離れないで」

「え？起きてたの？！」

「…どこ行ってたの？」

「杏から電話来たから話してたんだよ」

「そっか」

「なにい？寝呆けてるの？声がかわいいよ」

「涼子がいなくなって淋しかった」

「なにそれえ」

話していたら眠気が飛んでいったので起きることにした。

「涼子、今日も一日俺が独り占めしていいの？」

「え？ああいいけど」

「んじゃそうさせてもらいますよ」

「今日は練習も仕事もないの？」

「うん。だから涼子も俺を独り占めできるよ」

「はいはい。」

その時、私のケータイが鳴った。カオルから電話…
「だれから？」

「友達。」

「でないで…」

「なんで？」

「独り占めしたいから」

「わかった。」

どうせ西田とのノロケ話だろうと思ひ、出るのをやめた。

「ドライブ行くか？」

「うん！」

車に乗って出発した。

「あっ！私スッピンじゃん！化粧したかった…」

「じゃあ俺に任せて」

「ん？任せてって…」

「まあ、いいからいいからっ見てれば分かるって」

よく分からないまま連れてこられたのは……なんかお洒落なお店。

「ここだよ。」

「何？ここ…」

「俺の友達が経営してる店だよ。」

奥から男の人が出てきた。

「おお！聡、久しぶりだな。」

「おお久しぶり。」

「んで、その子は？」

「涼子っていうんだ。俺の彼女。」

「へえ。初めまして涼子ちゃん。俺はシュンよろしくね。」

私はあわててお辞儀した。

「初めまして」

「しっかしお前にこんなかわいい彼女が出来たとは」

「なんだよそれ。」

「まっいいけど。じゃあ早速始めるか。」

「おう、よろしくな」

「任せろって。お前が帰らせてあげないばかりにお前のスウェット着せるなんてかわいそうだからな」

「うるせえ！」

何があだかわからない…

「ちょっと待って何の話？？」

「変身させてあげるよ」

言われるがまま連れていかれ、髪の設定からネイル、メイクまですべてやってもらった。シュンさんが来た。 「おお綺麗だよ。鏡見てごらん」

全身鏡があるところに歩いていき見ると全然違う自分がいた。

「ええ！これあたし：？」

「聡に見せてあげな」

「はい」

聡のところへ歩いていった。

「おお！涼子か？！」

「そう・・・。」

「前から大人っぽいと思ってたけどそれ以上だな。高校生には見えないな」

それを聞いていたシュンさんが驚いていた。

「涼子ちゃん高校生なの？？」

「そうですよ。」

「じゃあ聡はちよつとした誘拐事件だな」

「まあ軽く誘拐されちゃいました」

聡がシュンさんと私をどついた。

「何言ってるんだよ」

「おいおい向きになるな、聡」

「シュンだって高校生に友達くらいいるだろ」

「いるよ。でも俺の友達って言うより妹の友達だから。」

「シュンさんって妹いるんですか？」

「ああいるよ。多分、涼子ちゃんとタメだと思う。」

聡がちよつと笑ってる・・・。

「なに笑ってるの？？」

「お前、シュンの妹知らねえのか？」

「え？知らないよ。」

「杏ちゃんから聞いてない？」

「なんで杏なの？」

「妹だから。」

「・・・ええ！！」

シュンさんも驚いた表情だった。

「涼子ちゃん、杏の事知ってるの？」

「はい。」

「知ってるも何も俺と涼子の出会いは杏ちゃんだから」

「まじかよ。あいつ彼氏の事しか考えてないのかと思ったけど違ったのか。」

「杏はすごい頼れる子ですよ。」

「そっかあ。最近、あいつ彼氏の事ばかりで俺には冷たいんだよお」

「いい年して何言ってるんだか。」

「聡は涼子ちゃんがいるからそんなこといえるんだよ」

「まあな」

「ノロケんなっ！早くデートに行け」

「はいはい。じゃありがとな」

「どうもありがとうございます」

「おう。また来てね、涼子ちゃんなら大歓迎だから」

「人の女を誘うな」

「ごめんごめん」

シユンさんの店を後にしてドライブ再開……。 「ねえ、どこいくの？」

「ん？ そんなの秘密に決まってるんだろ」

「あっそ！」

「怒るなよお」

車でしばらく走った

「ほら、ついたよ」

車から降りると・・・そこはすごい絶景だった。

「うわあ！すごい。」

「だろ？」

「うん。感動だわあ」

「よかった。」

そこでしばらく過ごした。

「暗くなってきたし帰るか？」

「そーだね。」

聡の部屋に荷物をとりに行って家まで送ってもらった。

第15話

今日はなぜかスッキリ目覚めた。

ケータイをみると10時・メールがきてる。

《涼子》！

おはよお。今日10時30分に学校前ね！≫ カオルからだ：7時に来てる！早起きだなあ：ってそんな事言ってる場合じゃない。約束の時間じゃん！ そう、前カオルとバスケット部の試合見に行くって約束してた：なんでまたバスケットなのか。カオル興味あったけ？とりあえず化粧して：：： 制服に着替えようと思ったけど時間もないしだるかったからスウェットのまま行くことにした。

なんとか時間には間に合った。カオルはもう来ていた。制服でばかり決めている。

「おお！涼子！つかス

ウェットじゃん」

「ごめんごめん。寝坊して時間なかったからさ」

「全然いいけどねっ！」 「ねえカオル、なんでバスケットなんかみるの？」

「え？：そりゃ顧問が西田先生だから」

やっぱり西田が関わってた：。

体育館のなかに入るとちようどうちの学校の試合が始まったとこだった。

ベンチにはもちろん西田。カオルはベンチしか見てない。

あたしは試合を見ることにした。

見たことある人がコートにいる：だれだろう？ いつ：：：あつ

！西田に呼び出された時に教室の場所教えてくれた人だっ！

バスケット部だったんだ。ハーフタイム：カオルは西田の所に走っていつてしまった。それと入れ代わりにさっきの教えてくれた人が走ってきた。

「あの：さ、俺のこと覚えてる？」

「え：ああ、前に場所教えてくれたよね？」

「そうそう。」

「バスケ部だったんだ」

「うん。今日はあの子の付き添い？」

「そうだよ。」 「あの子、ずっと練習とかまで来てマネ

ージャーやってる。」

「そーなんだあ」

「最後まで見て行ってね」

そう言って走っていった。その時、杏から電話が来た『涼子？今日は聡君と遊んでないの？』 「遊んでないよお。カオル

とバスケ部の試合見にきてる」

『なんで??』

「顧問が西田でカオルの付き添い」

『は？なにそれえ！また自己チュー許してるわけ？』

「そーゆー事じゃないよ」

『まあ涼子がそう思っていないならいいけど』 「うん。それよりどうした？」

『いや、今日さちょっと付き合ってほしいところあってさ』

「試合終わってからでいいなら大丈夫だよ」

『ほんと？カオルはいいの?』

「うん。多分、

西田のそこ行っちゃうと思うし」

『そっか。じゃあ学校の前で待ってるね』

「はあい。じ

ゃ後だね」

また試合を見ることにした。

うちの学校が勝ってるみたい。さっきの人が活躍してる。そうこういってるうちに終わってしまった。案の定、カオルは西田のところに走って行ってしまった。わかっていたけどちょっと落ち込む。杏との約束もあるから帰ろうとしたとき声をかけられた…さっきの人だ 「あ、あの…試合見てくれた？」

「え？あ、うん。お疲れさま。すごい活躍だったね」

「ありがとう。あのさ、名前教えてくれない？」

「名前?…涼子だよ」

「俺、隼人。よろしくね」

「ああよろしく…」

隼人くんは嬉しそうに走って行ってしまった。
「んだろう？」

「なんだった

第16話

早足で杏の所へ向かった。杏が車から降りてきた。 「杏〜！」

「涼子お！もう終わったの？」

「うん。」

その時、カオルが走ってきた…。

「涼子！どこ

行ったかと思ったあ。」

「あ、ごめん。カオル、西田のとこ行ったから帰ろうと思って」

「声くらいかけてよお、それよりさこれからバスケット部のみんなと打ち上げやるんだけどくるでしょ？」

「いや、ごめん私パス。」

「なんで？」

「これから杏と約束あるんだ。」

「え？だって今日は私と約束してたじゃん」

「試合は見たけど打ち上げまで聞いてないし、私バスケット部とあんま関わりないしさ」

「私がいるじゃん」

「いや、カオルは西田がいるじゃん」

「見守ってくれないの？涼子のおかげでここまで来れたのに…」

そんな会話を聞いてて見兼ねたらしく杏が口を開いた
「あんたさぁいい加減にしなよっ！どんだけ涼子に迷惑かけるわけ？」

「ちょっと杏やめて…」

「涼子はちよっと待っててよ。カオルに言いたいことあるんだから」
「でも…」

杏はイライラしていた。 私を通り過ぎてカオルに近づいていった。

「ねえカオル、最近ちよっと自己チューすぎない？」

「え？あたしが？」

「そう。涼子の事、振り回してんじゃないの？」

「そんなことないよ。」

「は？自覚なし？そーだよ、気付いてないからここまで出来るんだよね」

「さっきから何なの？」 「何なのじゃないよ！涼子巻き込むな
って言ってるの！」

「巻き込む？何の話よ」

「あんたと男の事だよ！」

車から誰か降りてきて杏を止めた。

「おい、杏や

めとけ」

「ちよつとシユンは黙ってよ」

シユンって…杏のお兄さんじゃん！なぜ居るのかはわからないけど
とりあえず杏を止めてほしい。

「黙れじゃないよ、涼子ち
ゃんに頼まれてないのにオマエの感情だけで突っ走るな」

その言葉に杏がとまった。その時、遠くから西田がカオルを呼んで
いる。 カオルは気まづそうだった

「じゃあ…私行くわ。」

走って行ってしまった。杏はちよつとキレ気味。

「ほら杏行くぞ。涼子ちゃんも乗って」

「あ、はい」

どこにいくのか車が走りはじめた。しばらくすると杏が口を開いた

「涼子…ごめんねえ。」 「なに急に？杏らしくない
じゃん」

「だって…シユンに言われて気付いた」

「ちよつと嬉しかった。杏がこんなに真剣にあたしの事考えてくれ
てるんだって思えて」

「やだあ、照れるじゃん」

ちよつとは元気だしてくれたみたいだ。

「ところでさ

あ、どこ行くの？」

「もうついたよ」

車から降りるとシユンさんの店だった

「なんでシュンさんのお店なの？」

聞き流され、

杏に押されて店の中に入った。杏とふたりで座って待っていると奥からシュンさんがワゴンを押しながらきた。

「この服、涼子ちゃんに似合うと思って」

「え？私にですか？」

「涼子やったじゃん！新作だよ、これ」

「いいんですか？」

「うん。着てくれる？」

「はい！もちろん」

ワゴンには何着かあってどれも全身コーディネートされていてとてもかわいい。

「んで杏にはコレ」 とシュンさんは杏に紙袋を渡した。中身はストッキングと下着だった。「作ってくれたんだ？！」

「ああ。デザイナーも乗り気でさ、近々うちの店で売り出そうと思ってる」

「ほんと？！」

はなしの内容が良く読めない…

「涼子！私の

デザインしたのが売り出されるって」

「え？すごいじゃん」

「涼子ちゃんにも杏のあげるよ」

杏デザインのストッキングをもらった。見ると“A n”とロゴが入っていて所々にラインストーンがちりばめられていた。次の日は学校だったので、長居は出来ず家まで送ってもらった。

第17話

朝、目覚ましに起こされたよく考えるとなぜシュンさんが1回しか会ったことがない私に新作の服をくれたのか……。とりあえず学校に行くことにした。歩いているとケータイがなっている。聡

から電話だ 「もしもし」

『あ、涼子？ 今日、暇？』

「学校終わってからなら……。どうしたの急に。」

『会いたい。涼子不足で力がでない』

「なにそれえ

」

『まっ、とりあえず学校終わったら電話よろしく！』 「わかった。」

涼子不足っていうのは意味不明だけど正直嬉しかった

教室に入るとカオルの姿はなかった。

そして杏の姿も。紗季は違うクラスなので来てるかわからないが行く気にもなれないので席についていた。

結局2人は来ないまま……。放課後になってしまった。スッキリしないが聡と約束があるので電話した。 「聡？ 終わったよ」 『おお

！ じゃあ迎えに行くよっ』 学校の前で聡を待っていると……。車が止まった、西田だった。 「おお何してんだお前」

「先生には関係ない……」

「それよりさあ、今日カオル来てなかった？」

「ああ来てないですね」

「そっかあ」

その時、後ろからクラクションをならされた。そしてかなり怒ったような低い声で怒鳴られた 「おい涼子、行くぞ」

「あ、聡。」

西田に軽くお辞儀して聡の車に乗った。ずっと無言だった。 「聡……怒ってるの？」

「別に。」

明らかに不機嫌そうだったなんで怒ってるのかわからなくて私もなんだか機嫌が悪くなった。

聡の家前で車は止まった

「なんでさっきから怒ってんの？」

「別に怒ってねえよ」

「怒ってんじゃない」

私まで怒鳴ってしまった。しばらく沈黙が続いた：そして聡が静かに口を開いた

「ごめん怒鳴ったりして。：で

も涼子が男と話してるのがすごい嫌で自分で思ってる以上にイラついちゃってさ。」

「あたしこそ：ごめん」

車から降りて聡の部屋に入った。

「俺さ、涼子

が他の奴のとこ行っちゃいそうで恐いっていうか：」

初めて聡が可愛く見えた：

「あたしはどこも行かないよっ。」

それから夜までずっと話していた。車で家まで送ってもらった。自分の部屋に入ると眠りに落ちた。次の日もカオルは学校を休んでいた。電話してみた：出ない：どーしたんだろうと思いつながら連絡の取りようがなく何も出来ずにいた。カオルが学校に来なくなつて1週間……。杏は気まぐれで来たり来なかったり。紗季は相変わらず優等生でカレともううまくいってるらしい。

私はど

うしたらいいのか：

第18話

なかよし4人で集まることがなくなって、カオルが来なくなってしばらく…… 私はなんだかうわの空で毎日を過ごしていたある日…… その日も教室の自分の席でぼーっとしていた。すると、紗季が走ってきた

「涼子っ！ 大変なの！」

かなり焦っている

「どうしたの?!」

「カ……カオルが……」

「カオルが何？」

「学校やめたって」

「え？」

「今、キャバ嬢やってるって……」

「ええ?!」

急すぎて理解しきれない、とりあえずカオルに電話してみた……着信拒否されていた……なんだか絶望的…… 紗季も着信拒否されていて連絡がつかないらしい。私は西田のところに行くことにした。

西田は国語準備室にいた。

「西田！ カオルになんかいったの?!」

なぜだか西田が憎く見えた

「なんだ？ 急に。教師を呼び捨てにするな」

「カオルに何言ったか聞いてんだよ」

「別に何も言っていない」

「じゃあ何でカオルは学校やめたの？」

「そんなの知るか！」

「無責任なことやってんじゃねえよ」

カッとなりすぎて自分でも歯止めがきかない……

その時、後ろ

から抑えれた真斗だった。

「涼子、やめろよ」

真斗に連れられて西田の元を去った。しばらくして冷静になると自分が原因なのかもしれないと思い始めた……真斗が何か言っていた

が耳に入らない。

ぬけ殻のように全く力が入らず何も考えられない。

とりあえず家に帰ろうと思いい真斗に返事もせず、ただひたすらに歩いた。

学校から家までそんなに距離があるわけじゃないがこの時だけは、はるか遠くに感じられた。

やっと部屋に着いてもなにもやる気がおきず放心状態だった。

そのまま眠ってしまったのか目が覚めると昼過ぎだった。

そして私の顔には涙が溢れていた。 ケータイが鳴って

いる：誰かから電話だったが出たくないのでシカトした。

私はカオルにひどいことをしてしまったのか：いや、カオルだけじゃない杏にもひどいことをさせてしまった。そして杏とカオルの仲を壊してしまった。それは4人の輪を壊したことになる。私がみんなをバラバラにしてしまった。私は自分の事しか考えてなくて被害者ぶってたんだ：杏、自己チューはカオルじゃなくて私なんだよ。カオル、杏にあんなひどいこと言わせたのも私だよ：。次の日も学校には行かず、部屋でぬけ殻のように：ただ涙を流し続けていた。私は何をしたらいいんだろう：わからない：ケータイを見た、着歴がずらーっとならんでいる 杏、聡、真斗、紗季、担任：。

玄関のチャイムが鳴っている：誰も居ないのか？ しかたなく

重い腰をあげて玄関を開けた そこには真斗がいた：

「涼子：ちゃんとメシ食ってるか？」 そーいえば

ここ何日か何も食べてない。「なんでお前学校来ねえんだよ」

「別に。ってか真斗は今日学校は？」

「俺はお前の様子見にきたんだよ」

「そっか、心配かけてごめん」

「こんな暗いの涼子らしくないじゃん。みんな元の明るい涼子に戻るの待ってるぞ。だからさあカオルと話してみろよ」

「無理だよ、電話繋がらないし」 「いや、今待
ってもらってんだよ」

「ほんと?!」

「ああ。公園にいるから行けよ」

「ありがとう、真斗」

いつのまにか涙が溢れていた。

なよ!」

真斗に感謝しながら公園へ走っていった。

「おい、泣く

第19話

公園には1人女の人がいたカオルなのかすごく大人っぽく見える…

「カ、カオル？」

「涼子?! ちゃんとご飯食べてるの? なんかすっかり小さくなっちゃった」

「カオルの方こそすっかり大人になっちゃって」

「そうかな…?」

「…カオルごめんね」

「なにい? 急に」

「だって…学校の事」

「ああ、学校なんてやってらんなくてさあ」

「嘘! そんなの嘘でしょ」「…まあね。でも涼子のせいとかじゃないし」

「じゃあなんで？」

「西田にさあやっぱ女としては見れないって生徒だからって言われてさ」

「やっぱアイツか、許せない」

「それだけじゃないの…杏に言われてよく考えてみたの、あんな男に振り回されるなんて私らしくないなって思ってたさ」

「だからってやめることないじゃん!」

「学校にいた

ら涼子にこれ以上に頼っちゃう気がしてさ、それじゃダメだから」

「頼ってくれていいよっ」

「もう散々頼ったから涼子から卒業しなきゃ」

「友達じゃん! 卒業とかないじゃん」

「涼子とはずっと一緒だったよねえ。長く居すぎて、涼子の存在が当たり前になっちゃって。それにさ学校にいたら西田のこともあきらめられないと思うし」

「ちよつと意味不明だけど西田のことはもう忘れられたの?」

「うん！もうすっかり。」

「そーなんだ。」 「そうそう！着信拒否してごめんね。頼らないためにしたんだけど真斗に涼子の様子聞いて自分勝手な事してたって思ってたちゃんと話すことにしたんだ」

「：私に呆れて嫌になったのかと思ってた」

「そんな事あるわけないじゃん！：そろそろ行かなきゃ、じゃあね」
「あ、うん：」

なんだかすっきりしないけどとりあえずよかったと思い家に帰った。

お風呂に入ったときに鏡に自分が映った：やっと真斗やカオルが行ってた意味がわかった。ゲッソリと疲れ切っていた。ケ―タイをみると聡から電話がきていた。 後でかけ直せばいいと思いとりあえずご飯を食べた。その時のお母さんはすごく優しい笑顔で見守ってくれた。

「お母さん、ご飯

おいしいよ」

「そう？！」

お母さんは涙ぐんでいた：そんなに心配かけてたんだ：。 いっぱい食べて部屋に戻った。満腹すぎてウトウトしているとケータイが鳴った聡から電話だった 「もしもし：」

『あ、涼子か？』

「うん」

『何回も電話したんだぞ！何ででないんだよ』

「ごめん」

『だからなんでって聞いてんの』

「ちよっと：」

あって：」

『なんだよ、ちよっとって。かけ直すのもできない程のことなのかよ』 「いや：そんなこともないかな。」

『だからなんなんだよっ』

「ほんとごめん」

『あつそ。もういいや』

切られた：も

う聡とも終わりかもしれない：でも私が悪いんから何も言えない。

また気分が落ちてきた：。そのまま眠りについてしまった。

第20話

朝起きれた…でも頭が痛い　だが学校に行かなければ…鏡にはまだ疲れ切っている自分の顔。今日は化粧をちよつと濃くしていくことにした。

制服をちゃんと着て家を出た。教室に入り席に座った結局カオルは学校やめてしまった…まだなんだかボーッとしてしまう。

「涼子？」

「おお！杏じゃん。おはよっ！」

「ねえどーしたの？なんか今日、化粧濃くない？」　「え？そうかな…」

「なんかあった？」　「明るくしたつもりなのに、顔にでてたのか…？」　「別になんもないよっ」

「嘘つき」

「え？」

「聡くんとなんかあったでしょ？」

「ああ聡…でもなんで？」

「昨日のバスケの練習のとき、なんかイライラしてたから。それになんか最近様子がおかしかったらしいからさっ」

「そーなんだ…」

「涼子の事聞こうとしたら急にどっか行

っちゃうし。ねえ、なにがあったの？」

「ちよつとね…」

「んゝまあ話したくなったら話して。でも！ため込んじゃダメだからね」

「うん…ありがと」

杏はどこかに走って行ってしまった。それからただ座っていた。授業も全然頭に入らない…

聡は…私に怒ってるのだろう。今まで聡の優しさに甘えてたのかもしれない…そんなことを考えてるうちに放課後になってしまった…家に向かって歩いていると真斗が走ってきた。

「よっ！涼子っ、一緒に帰ろうぜ」

「急に何？ 気持ち悪い」

「きもいってひどいなあ」

「ごめんごめん、嘘だよ。でもなんでまた帰ろうなんて…」

「なんとなくだよ」

「そっか。真斗と帰るなんて久しぶりだねえ」

「久しぶりなんてもんじゃないよ！ 大昔だよ」

「大袈裟だよ」

「ところでちゃんと飯食ってるか？」

「食べてるよっ、まだ顔ひどい？」

「いや、いつ

もより化粧濃いから顔色悪いのでも隠してるのかと思って」

「ああ、隠してるのはホント。」

「まあ食べてるならいいけどさ。もうカオルの事は解決したろ？」

「う…ん。コレでいいのかな。」

「カオルが決めたことだから応援してやるしかないじゃん」

「…そーだよね」

「俺さ…カオルの支えになるって決めたんだ。カオルにも伝えた」

「え？」

「まあ振られたけどさ、待ってるって言

つといた。ちよっとストーカー入ってる？ 俺。」

「いやカオルうれしいんじゃないかな。嫌なときは態度に出ると思うし。」

「そーだな」

うれしそうな真斗の顔を見ながら家に帰った

第21話

朝、学校へ向かいながら聡の事を考えた。やっぱり私は聡の事を好きなんだと実感したがどう行動したらいいのか：真斗はカオルへの気持ちに嘘をつかずに真っすぐぶつかっていった。傷つく事を恐れずに：。私にそんな勇氣は持てるのか。

教室についてもそのことをずっと考えていた。

「涼子…？」

「あつ、杏。何？」

「聡くんの事もう好きじゃないの？」

「え：そんなこと：ない」

「じゃあ男とふたりっきりで歩いてたりとか話してたりとかやめたら？」

「何のこと？」

「昨日：聡くん学校の前に来てて一緒に涼子待ってたら：」

「え？来てたの？」

「うん。声かけようとしたけど男と歩いてたから」

「ああ真斗の事？」

「そう。聡くんすごい悲しそうな顔してた。」

私は何やってんだろう：？聡は許そうとしてくれたのかもしれないのに：。聡に電話した：出ないので留守電に残すことにした。

「聡？ごめんね：私、全然聡の気持ち考えてなかった。でもね、私には聡が必要だってわかったの。だから：もし私の事：許してくれるなら電話ください」

涙があふれて止まらない：杏が誰も居ない教室に連れて行ってくれた。

「涼子、大丈夫。きつと伝わるって！」

杏は私を慰めてくれる：私が悪いのに：自業自得なはずなのに、こんな優しい救いの手が差し伸べられてしまっているのか：。杏のその優しさがまたつらかった：。あれから数日間：聡から連絡はない。やっぱりダメなんだろう：。もう忘れようと決心しかけた日、

ケータイは聡専用のメロディーを鳴らした。電話に出ると女の人の声：『あんた誰？聡の何？』 自分から電話しといて失礼な人と思いつながら半ギレで答えた 「あんたこそだれ？」

『は？あたし聡の彼女』 か…のじょ…。なんだか力が抜けてしまった。しかし女は続けた

『だからあんた聡とはどんな仲なわけ？』 「ただの知り合い。迷惑だからでしゃばらないで。」

その女は甲高い声で叫んでいたが電話を切った。 聡の着メロでおきた期待が崩れ去った。彼女がいるならもう振り向いてくれないって事だろう…。

やっぱり忘れるべきなんだと自分に言い聞かせた。聡を忘れるために勉強で暇を作らないようにした。学校でも家でもひたすら勉強した。最初は聡の事が頭から離れなかったがだんだん集中出来るようになってきた。おかげで成績は鰻登り…しかし心は満たされないままだった。勉強以外に紛らわす方法を考える余裕もなくてただひたすら机に向かうしかなかった。不思議なことにそれが苦痛にかわることはなかった。杏も紗季も真斗も話しかけてくれるのだが勉強を理由にすぐ会話を終わらせてしまった。みんなにひどい態度をとってるのはわかるけど今はそうするしかなかった。また前みたいに取りこもりみたいなことしたくなかった。そんな毎日が続いていた…ある日、バスケット部の男の子…確か隼人君が話し掛けてきた。

「涼子ちゃん！元氣？最近、雰囲気変わったね」

「ああ隼人君、久しぶり。何か用？」

「あのさぁ話したいことがあるんだ。放課後、図書室で待ってるから」

そう言い残して行ってしまった。

第22話

放課後、言われたとおり図書室に行くと隼人君がいた

「来てくれたんだ、ありがとう」

「何？話って」

「俺、涼子ちゃんの事好きなんだ。だから俺と付き合って？」

好き…今の私には嬉しい言葉ではなかった。恋愛から逃げ

ている私は好きと真っすぐな気持ちをぶつける隼人君に少し不信感を覚えた。それは好きという言葉にだったのかもしれない。隼人君は悪い人じゃないと思うが隼人君の気持ちには応えられない。「ごめん。無理」

「なんで？」

「んゝきつと隼人君の事好きになれないからかな」

「そんなのわかんないじゃん！」

「いや、わかるよ」

隼人君は図書室を出ようとする私の手をつかんだ。「俺、涼子ち

ゃんを幸せに出来るよ」

この自信…前にも、そう聡も何の根拠があるのか自信たっぷりだった。また涙があふれてきそうになった。

「何その自信、絶対無理だから。」

「俺は涼子ちゃんをそんなに悲しませる男じゃない。そんな男なんて忘れるよ」

「何いってんの？勝手な想像で言わないで。」

「想像じゃないよ。事実でしょ？」

「さっきから何なの？いい加減にして！隼人君、最低ね。もう私に構わないで」

掴まれた手を振り払って、走った。その時にはもう涙が止まらなくなっていた。涙で前が見えなくなり転んだ…起きる気力もなくてそのまま泣いていた。「お？涼子か？どうした」

優しくて暖かい声：担任だった。

「あ、担任…。」

涙を拭いてお辞儀して帰ろうとしたが涙が止まらない上に引き止められた。「おい、待て待て。丁度いいや話あるから来いよ」

ついていくと誰も居ない教室だった。

「まあ座れよ」

そういわれ担任の向かいに腰を下ろした。

そしてティッ

シュをくれたしかも箱で。

「なんで箱ティッシュもつてんの？」

「職員室の俺の机に置こうと思ったんだよ。だから全部使うなよ」

「そんなに使わないよ！」

「泣いてんのは転んだならだけじゃ無さそうだな」

「誰が転んで泣くかつ！」

「お前。」

「違う！転んだから泣いてるんじゃない」

「おお、強い子だなあ。」

「バカにしてんのかあ？！もう高校生なんだから」

「そーだったな。ところで最近、勉強頑張ってるな、いろんな先生から誉められちゃって誇りに思うよ」「ほんとお？！ありがとうお。」

さすが担任わかってるねえ」

「まあな。ただ関心しない事もあってな。友達関係…うまくやってないだろ」

「まあ…、でも勉強がんばってるしいいじゃん」

「確かに勉強の面では認めてるよ、でも人との関わりはお前が1番得意なことだったじゃないか」

「苦手を克服して得意に変えたんだよ。」

「人間関係を疎かにしてまで勉強って大切か？」

「教師がそんなこといいのお？」

「人として話してるんだよ。対等に話すときに教師目線はいらないからな」

こういう見下さない感じが担任の好きなのところだった

「じゃあ私は人としてダメって事？」

「違う。俺はダメなときにしか話し掛けないわけじゃないだろう」

「そういわれれば…」

「だろ？人としてダメなんて事はないんだよ、気持ちの持ちようで沈んだり良くなったたりするだけなんだよ。」「今は沈んだけならその内戻るから心配しないで」

「沈んでるときにちゃんと受けとめられれば心配ないけど今のお前は勉強に逃げてるだろ？」

「そんなことないよ。時間が経てば…」

「逃げたのが勉強って所はさすが涼子だと思うけど、勉強で結果が出て心隙間あるだろ？」

「…うん」

「違うことに逃げてても結局は解決しないんだよ。ちゃんと向き合わないや時間がかかってても変わらないぞ。」

「な…んでわかるの？」「そんなのすぐわかるよ！お前の担任だから！お前はテキトーだっていうけどちゃんとやってんだぞ」

「テキトーって言うてもいい加減だなんて思ったことないし、担任のこと結構好きなんだから」

「おっ、愛の告白か？」

「ちっ違うよっ。もうっ！せっかく良いこと言ってんのにっ！」

「悪い悪い。涼子がいつものテンションじゃないとなんか調子でなくてな」 「やっぱ相方から居なくちゃねえ」

「相方じゃないだろ。それより直りすぎると勉強しなくなるから程々にな」

「はあい。」

なんだかすっきりした気持ちになれて軽い足取りで帰ることが出来た。

第23話

担任の話を聞いて今までの張り詰めた心が一気に楽になった気がする。朝、みんなに謝ろうと決心した。学校へ行きまず紗季の所へ行った。

「りよ…涼子?! どうしたの?」

「ごめんね、氣遣って話し掛けてくれたのに変な態度とって…」

「ううん。それよりちょっとだけ前の涼子にもどって良かった」

「うん…」

「それより杏のどこ行ってあげな。あの子まで落ち込んじゃってるから元氣な姿見せてあげな」

「うん。紗季ありがと。」

杏を捜し回った、けど見つからない…電話してみた 『もしもし』

「杏? 学校来てないの?」

『来てるよ。門の所に』 「じゃあそこにいて! 今から行くから」

そういつて門まで走っていった。杏が立っている。 「杏! 今まで

ごめんね。私、強くなるから」

「…ねえ涼子、聡君の事どうなった?」

「あつ、どうなる

も何も聡、彼女いるらしいから」

「誰からそんなこと聞いたの?!」

「え? 聡の彼女って言ってた人から」

その時、誰か歩いてきた…聡だった。

「涼子…ごめ

ん。俺さ勇氣なくて電話出来なかった。でも留守電聞いたよ。すげえ嬉しかった」

まだ完全に忘れられたわけじゃなかった…涙があふれそうだった。

「何言ってるの? そんな事言ったら彼女が悲しむよ」

「俺、彼女なんていない」

「嘘だよ、電話きたし」 「いや本当だから」

「じゃああの女は誰だったわけ? 何でもない人が電話かけてくるわけ無いじゃん。もう授業だから、じゃあね杏」

走って教室に帰った。昼休み、杏が来た。

「涼子、女から電話来たって本当？」

「うん。聡のケータイからねっ」

「でもさ聡君は彼女いないって言ってたじゃん」

「じゃあなんで聡のケータイから来たの？」

「彼女かどうかもわかんないじゃん」

「その人彼女だって言ってたもん…」

「それで今ま

で悩んでたの？」

「悩んでたわけじゃないよ…忘れようとしてた。」

「なんで言ってくれなかったの！」

「ごめん。心配かけなくなかったから」

「心配かけてよっ！もっと頼ってよ…これ以上、涼子が変わっちゃうの見たく無いよ。」

「ごめん…」

「もう聡君の事忘れられたの？」

「ん…忘れた

つもりだったんだけどね…まだ忘れきれてなかったみたい」

「じゃあさ、確かめよ」

「何を？」

「その謎の女の正体を！聡君、自分を責めててさ、涼子には自分は相応しくないって気持ちを押さえ付けてたんだよ…でも涼子の留守電聞いて、電話しようとしたけど恐かったんだって。そんな真っすぐで純粋な人が女関係で嘘付けるわけ無いよ」

「そう…かな」

放課後、杏に連れられて門に行くときまだ聡がいた。

「聡君！誰か

わかった？」

「いや…わかんねえわ」

「そっかあ。」二人とも探してくれていた…私のために…

「杏、…もういいよ」

「涼子？なんで？」

「もうわかったから」

「何がわかったの？」

「よくわかんないけどスッキリした。帰るね」

「ちょっ…ちょっと涼子」

「ごめん杏、一人になりたいんだ」

「そう…でも大丈夫？」

「うん。明日もちゃんと学校来るから」

心配そうな杏を横目に家に帰った…

第24話

朝、目が覚めた：昨日帰ってきてからすぐ寝てしまった。今までの疲れがどつと出てきてしまったみたいだった。体は怠いがなんだか気分は晴れている。いつもどおり学校へ行く：教室の前に隼人君が立っていた。私は気付かないフリをして通り過ぎた。すると呼び止められた。

「涼子ちゃん：」

昨日の事、忘れるわけ無い。まだ私の怒りが納まったわけではない。

「気安く呼ばないでよ」

「昨日：ごめんね」「私が言ったこと覚えてる？もう構わないでって言ったの！」

「でもさ、心配なんだ」

「何が？」

「無理してるんじゃないかと思って」

「無理して構わないでって言ったわけじゃないの、この際だからハッキリ言うけど迷惑だしもう私に近づかないでほしい」

隼人君は何も言わず走って行ってしまった。「ちよつと言

いすぎたかな：まあいっか」

教室に入り席に座った。今

日は何もなかったことを願った：もうあったけど：最近はいろんな事が起こりすぎて混乱していたから何にも考えない時間がほしかった。放課後：職員室へ行った

「担任！いる？」

「こらっ涼子！敬語を使え！！」

「おお！いるじゃん」

「はあ、敬語使う気ないなお前は：。」

「今度は担任が暗いぞお！相談乗ってあげよっか？」

「うるせえ。：涼子、元気になったみたいだな」

「うん！担任のおかげだよっ。」

「そりゃ良かった。じゃあお礼に図書室から資料とってきて。この紙に書いてあるから」

「はぁ？何でそうなるわけ？」

「よろしくなっ」

そう言ってどっかに行ってしまった。

仕方なく図書

室に行った。

「担任、こんなに資料使うのかよっ！見つからないしっ」

捜し回っていると一つの本に目が止まった：

背表紙には【あなたに】と書いてあった。結構、恋愛小説は好きだから資料を探すのは後にして読むことにした。

人を心から信じることが出来ない女の子の話：なんだか今の私と重なる部分がある気がする：

外は暗くなっていた。

「やばっ！」

資料は揃っていなかったがあるのだけ持って職員室に走っていった。

「担任？持ってきたよ」

「おお涼子。遅かったな」

「だって量多すぎだし」 「ああごめんな。って、全部揃ってないぞ？」

「あっ！ばれた？実は…本を呼んでまして…」

「まあこんだけ探してくれたんだから許そう」

「ありがとっ！やっぱ担任は良き理解者だ」

「何いってんだよ、もう暗いから早く帰れよ」

「はあい」

昇降口に行くとは暗くて気味悪かったので早く帰ろうとすると：ちようど出口の所に隼人君が立っていた。

「涼子ちゃん、俺諦めないから。」

「私、絶対に

隼人君の事好きにならないし関わりたくないの、これ以上ひどいこと言いたくないから、わかって」

「わからない。だって俺は涼子ちゃんを幸せにしたいもん」

「私を幸せにしたいって今あんた嫌がらせてんじゃん」

「俺の愛を受けとめてくれよ。わかってくれよ」

「わかんないしわかりたくもない。もういい加減にして」

走った。後ろから隼人君が追いついてくる。

隼人君に恐怖

心さえ憶えた：門まで走り曲がったとき誰かに腕を掴まれた。恐る恐る振り替えると：聡だった。そして隼人君が追い付いてきた。私は聡の後ろに隠れた。

「おい、涼子ちゃんを離せっ」

「おめえ、誰だ？」

聡は低い声で言った。

「離せって言ってるだろ！俺の涼子ちゃんに手出しさせないぞ」

「俺のだと？涼子そうなのか？」

いきなり聞かれて驚いたが大きく首を横に振って否定した。すると今まで握っていてくれた手が離れて聡は隼人君の方へ歩いていった

「違うじゃねえか、お前ストーリーカーか？」

「そんなわけないだろ」

すると隼人君のむなぐらを掴んだ

「涼子嫌がっ

てんだろ、もう近づくんじゃないやねえ！ついでに言うと言と涼子は俺のだから、勘違いすんな」

そういうと隼人君は走って行ってしまった。

第25話

聡の手が離れて不安で恐くなっていた私はうずくまっていた。そこに聡は戻ってきてそっと抱き締めてくれた。

「涼子、本当にごめん。俺もやっぱりお前が必要だって気付いたんだ。だからずっと側にいてほしい」

「うん。私こそごめんね」

聡の腕のなかは広くて暖かくて安心できた。私の頬には自然と涙が溢れていた。

「恐かったろ、もうあんな思いさせないからな。俺が守ってやる」
私は涙が止まらずうなづく事しか出来なかった。 「よしっ、家まで送るよ」

言われたとおり家まで送ってもらい私は家の前で見えなくなるまで聡を見送った。そして心配してくれている杏に報告するために電話した：

『はあい。杏です』 「涼子だけど

今大丈夫？」

『あっ！涼子？！何？どーした？』 「寝てたの？」

『まあね。んで？』 「あ、そうそう。聡と仲直りできたの」

『まじでえ？！』 「うん」

『よかった。ほんと嬉しいよっ！』 「いろいろありがとね」

『いやいや、当然の事よ。ねえ、明日ふたりでお祝いしよ？』

「え？！いいけどなんでふたりなの？」

『話したい事もあるし』 「そっか。わかった。」

『じゃあ放課後、門の前で待ってるから』 そう言って電話が切れた。話って何だろう：ダーリンと喧嘩したとか？別れたとか？：なんだか不安になってきた。次の日、杏は学校には来ていなかった：。 放課後、門の所に行くと杏が立っていた。

「杏！今日学校来なかったじゃん」

「まあね。」

「それよりファミレス行こっ」

「う…うん」

杏に引っ張られて前、4人でよくたまっていたファミレスへ行った。すると杏がしみじみ話しはじめた。「ここ、うちの家みたいなものだったよね」

「なんでここにしたの？ファミレスなんていっぱいあるのに…」

「ん…、初心に返りたかったっていうか昔を感じたかったのかな。嫌だった？」

「嫌では無いけど2人で来るとやっぱり足りない気がしちゃって」

「ほんと紗季もカオルも呼んだんだけど忙しかったみたい」

「カオルと連絡とったの?!」

「うん。ちゃんと話し合って仲直りしたんだからあ」「そーなんだあ。でも何で急に来ようと思ったの?」

「計画してから集まればみんなで来れたのに」「ん…その事で話があるんだ…」

「何?!」

「私、明後日から…海外行くんだ」

「旅行でしょ?」

「ううん。何年かわかんないけど、勉強しに行くんだ。」

「何の勉強?」

「ほら私、前にストックキングとかデザインしたじゃん?それで本格的にやろうと思って。世界の杏になるまで帰ってこないつもり」

「え?なにそれ、本気?」

「当たり前じゃん!」

杏の目は希望に満ちて輝いていた。「そっか。」

応援するよ!大物になるんだよ。」

「うん。」

おめでたい事ばかりなのでふたりでパーティーみたいにかくさん

食べてしまった。

「やばい。食べ過ぎたあ」

「3人以上食べたよね」

「ねっ、明日からダイエットしなきゃ」

「杏、外国行ったらご飯おいしくて太っちゃうんじゃない？」

「そうかも！やばいなあ」そんな他愛無い話を暗くなるまでずっとしていた。「杏：そろそろ帰って準備したほうが良いんじゃない？」

「う：ん。でも涼子と別れるの淋しくなっちゃった」

「何言ってるの！一生の別れじゃないんだから。私に会いたくなったら電話しておいで。」

「うん！よしっ、じゃ帰るねっ」

しばらく杏とは会えなくなるだろう：次いつ会えるのかもわからない：でもこれが杏の選んだ道。カオルが学校やめることを決めたように杏も自分の足で歩み始めたんだ。

第26話（前書き）

高校卒業後、数年後の話です。

第26話

数年後：

高校を卒業してしばらくたったある日、最近毎日、聡と居る。もちろん私は大学で聡は仕事で会っている時間は少ない。

でもあのケンカ以来、愛が深まった気もする。

今日は休みなので本屋に行くことにした、杏が外国に行ってから海外の雑誌をチェックすることが習慣になっていた。ある雑誌を手に取りパラめくっていると見た事ある顔が：杏？杏に似てるような気がする：文章に目を向けるとやはり杏の名前が。内容は杏のブランドはフランスに本店がありニューヨークにも店を出すらしい。

「ねえ、聡。杏かなり有名になってるみたい」

「これが杏ちゃん？大人になったなあ」

杏の写真を見てふたりで驚いてしまい勢いで買ってしまった。聡の部屋でふたりで買った雑誌を眺めていた

「なあ、涼子：」

「ん？」

「涼子が卒業したら俺と結婚しよう」

え？でもまだ先だよ？！そんな事言っちゃていいの？」

「待ってるから。」

「うれしい。ありがと」

聡のプロポーズは嬉しかったがなんだか体が怠いような気がして喜びきれない：聡ともっと一緒に居たいが帰ることにした。

次の日もなんとなく怠い感じで、家でゆっくりすることにした。すると急に吐き気が襲ってきた：そういえば生理が遅れている：まさか：妊娠？！早速、検査薬をかって調べるとやっぱり妊娠していた：どうしよう、聡は何というだろう？喜んでくれるだろうか：それとも：不安で落ち着かなくなってしまった。でも言うしかない。不思議と勇気が出てきた。聡は今日は家にいるはずだから電話することにした。『涼子？どうした？』

「あのね：話したいことがある

るの」

『おう。なに？』

「会って話したいの」

『ああそっか、じゃあ今から行くよ』聡を待つ時間が長く感じる…
勇気が出ても不安が消え去ることはなかった。 聡が来て私の部屋
のテーブルに向かい合わせて座った

「涼子の部屋久しぶりだなあ」

「そうだったけ？」

「うん。それで？話って何？」

「えっと…」

大きく深呼吸した

「私ね、に…妊娠したみたいなの…」

「…ほんとか？」 聡は喜んでないのか…？ 「市販の出調べただけ
なんだけど…。聡、嬉しくない？嫌だったら別れてもいいよ。それ
なら今どっか行っちゃって。」

自分でもなぜここまで言えるのか分からなかった。

言った後に恐くなり目をギュっとつぶり下を向いていた。聡が立ち
上がった感じがする。やっぱりもうダメなのかな。聡が居なくなっ
たら私ひとりだ…。 お腹の子はお父さんがいなくて悲しい思
いをするだろうか。そんなことを考えていると涙が出てきた。

その時…抱き締められた。顔をあげると聡が私を抱き締めてくれて
いる。「聡…」

「別れるって何だよ！俺すげえ嬉しいんだからなっ！産婦人科行こ
うぜ。いやっ、その前に涼子は産みたいと思うか？」

「…うん。いい？」

「なら決まりだ、病院行くしかないだろ」

「でも…怖い。」

「大丈夫。俺がついてるから」

聡にすぐく勇気づけられ、産婦人科に通い始めた。 「涼子のお母
さんには言ったのか？」

「まだ…。」

聡が挨拶にきてくれたから付き合っていることは知っている。プロ

ポーズされた事も話した。「じゃあ一緒にいこう」

「行ってくれるの？」

「当たり前だろ」

聡と一緒にと言ってくれたことが嬉しかった。

第27話

聡はスーツで家まで来た。家にはお母さんとお父さんが待っている。

母と父の向かいに私と聡が座った。聡と私の両親は仲がいい。父も頑固な感じではなくすごくフレンドリーだ。しばらく世間話をして聡が本題を切り出した。「今日は報告があって参りました」

聡の改まった態度にみんな真剣な表情になった。そして聡は私に目で合図した：

「あの：ね私、妊娠しました。それでね産みたいの」予想どおり二人は驚いていた。そして聡が口を開いた

「僕も産んでほしいと思ってます。それで言うては何ですが、涼子さんと結婚させてほしいんです。決して子供が出来たからと言うわけではなく前から考えていたことなんです」

するとお母さんがニコニコしながら話し始めた

「聡くんが涼子にプロポーズした事は聞いてますよ。お父さんどう思う？」

「うーん、聡なら任せられるが住む所とか式とかは考えてるのか？」

「出産の後、決めたいと思ってます。」

「私が産むまではこの家にいたいって言ったの。」

「そうか。なら反対する理由もないしな」

「ありがとうございます」

「もう家族同然だったからあんまり変わる気がしないな」

そしてまた世間話になっていった聡が帰って私は部屋でゆっくりしていた。すると母が来た。

「英語の手紙来てるよ」

「え？なにそれ」

受け取るとエアメール。杏からだった。慌てて開けて中身を読んだ。

近々、日本に帰るからみんなが集まりたいとかいてある。日本につ

いたら電話くれるらしい。なんだか心踊った。すごくたのしみだ。それから何日か体が軽く、体調のいい日がつづいた。ある日、朝起きようとするとき起き上がれない。また腰が重く体調が悪い。しばらく寝てようと思いき起き上がるのを止めた。しばらくすると電話が来た

「もしもーし」
『涼子？ 久しぶり！ 元気だった？ 杏だよっ』

「え？ あ…杏？！」

驚いて起き上がれてしまった。
『今、日本に帰ってきたんだあ』

「そうなの？！」

「うん。ちよっと時間が出てさ」
『でも今が一番忙しいんじゃないの？ お店増やすんでしょ？』

「え？ 何で知ってるの？」

「雑誌に載ってたよ」

「ほんとに？！」
「うん。顔もばっちり写ってたし、有名になったんだねえ。」
『まだまだだよ。それよりさあみんな食事でもない？』
「いいねえ。じゃあみんなに連絡とってみるよ。」

「紗季に連絡とって、私カオルに連絡するから」

「わかった。じゃあまた電話するね」

電話を切ったあと、急いで紗季に電話をした。
『はい、もしもし』
「紗季？ 涼子だけど」

『えっ涼子？ 久しぶり！ 元気だった？』
「うん元気だよ。」

よ。あのさあ杏が日本に帰ってきたからみんなで集まりたいんだけどいつ空いてる？」

『杏帰ってきたんだあ！！ んー来週ならなんとかなりそう』

「そっか、わかった。ところで彼氏とは仲良くやってる？」

『ああ別れたよ。私からさよならしちゃったんだ。』

「え？なんかあったの？」

『私、教師を目指すから目標達成するまで距離を置きたいって言ったの。それが無理だったんだと思う。』

「そーかあ」

『でもさ、教師になるまでは待てないからせめて教育実習までにし
てって電話きたんだ。あっちも就活頑張るって言ってるしどーしよ
うかなって考えてる』 「なんだあゝ結局くつつく運命なんだね」

『そんなことないよ。まだ先だしわかんないじゃん』

「はいはい。でもそれがお互い支えになってるんじゃない？」

『まあね。』

「集まるときにじっくり聞かせてもらうからねえ。また電話するか
ら。」

電話を切り杏に電話しようとする電話が来た：聡から。

「はい？どうしたの？」

『おお、体調どうだ？』 「んゝまあまあかな」

『そうかあ』

「明日の試合はちゃんと見に行くよ」

『え？』

「その事が気になってたんでしょ？」

『：まあな。もし行けそうならシュンが迎えに行くから俺に電話し
ろよ』 「うん。明日がんばって」 『おう。』

明日、聡のバスケの試合を見に行く約束していた。なんとなく明日
は体調が良い気がする。杏から電話が来た。 「もしもし？」

『涼子？カオルね、来週なら大丈夫だって』

「紗季も一緒。」

『じゃあ来週の水曜日、ちょうど一週間後で、いいかな？』

「大丈夫だとおもうよ。紗季に言っとく。」

『場所と時間は私が後から地図付きメール送るね。』

「わかった。あっ、明日さあ聡の試合見に行くんだけどいいかない？」

『んゝやめとく、明日ちよっと仕事しようと思ってんだ。今ちよっ
と新しいデザイン思い浮かびそうだし』

「そっかあゝダーリンの試合見なくていいの？」

『見たいけど：今度で良いかなって感じ』

「そっか。じ

ゃあメールよろしくねっ」

切った後考えてしまった。杏は大人になったのか、なんだか彼氏だけだったあの頃とは違う感じだった。

第28話

朝、昨日の予想どおり体調が良い。早速、聡に電話した。

「聡？ 今日、絶好調だから見に行くね。シュンさんをお願いしたい？」

『おっよかった。じゃあシュンに言っとく。多分1時間くらいで行くと思うから準備しとけよ』

「はあい」

着替えたり化粧したりしていると1時間たったらしく外にシュンさんがいた。慌てて外に出た。「ごめんなさい、待たせちゃって」「いや今来たとこだよ。それより焦らなくていいよ。涼子ちゃんになんかあったら俺、聡に何されるか分かんねえからな。あいつ今デレデレだよ。涼子ちゃんとうまくいってる上に子供までいるってんだから。」

「そーですかねえ」

「そうだよ！ それより大切な事いってなかったな、涼子ちゃんおめでとう。お腹の中の子と聡と幸せになっとな」

「ありがとうございます」

「いえいえ。そろそろ行くかっ」

シュンさんの車に乗り込み走りだした。「あの、シュンさんは彼女とかいないんですか？」

「彼女？ ああいるっちゃいるよ」

「曖昧なんですか？」

「まああんまり会えないからね」

「遠距離恋愛ですか？」

「まあね。……着いたよ」

シュンさんと体育館に入っていくと人がたくさんいた

「すごい人だなあ」

「ホント。すごいですね」

その時、聡が走ってきた。

「涼子、体大丈夫か？」

「うん。今日はがんばってねっ」

「おう。シュンも来てくれてありがとな」

「ああ。俺に気付いてたかつ」

「当たり前だろっ！大切な涼子を連れてきてくれてたんだからな」

「そっちなよっ」

「まあな。じゃ、俺行くから、ちゃんと応援しててくれよ」

聡はチームの人たちの所に戻った。杏のダーリンもいた。「シュンさん、杏が日本に帰ってきてるの知ってますか？」

「ああしってるよ。」

「今日、誘ったんですけど仕事すすめたいからって断られちゃったんですよ」

「そうか。」

「杏、前みたいにジョンにゾッコンじゃなくなっちゃったんですかね」

「あいつも大人になったんじゃないかな？」

ふとみるとシュンさんは何故か淋しそうな顔をしていた。「なんだかしゅんさん杏の保護者みたい」

「え？」

「なんか杏が大人になっていくのを見ると淋しいみたいな顔してますよ」

「そうか？」

聡の試合が始まった。二人とも見入っていた。やっぱりバスケットしているときの聡は一層輝いている。試合はあっという

間に終わった。と言うより見入っていたので早く感じたのかもしれない…。結果は聡のチームが勝った・・・

聡が着替えてきた。

「聡おめでとう」

「おう！ありがとなっ」

その時、シュンさんのケータイが鳴った

「もしもし？おつ杏か、どうした？」

だんだんシュンさんの声が小さくなっていった。そして電話を切ったシュンさんが私達のほうを向いた。

「悪い！俺、用事出来ちゃったから行かなきゃなんだごめんな。」

「おう。気を付けろよっ」

「ああ。今日はお疲れ聡。涼子ちゃんもおつかれ」

「あっ、はい。」

そういうとシュンさんは急いで行ってしまった。

「シュンさんなんであんなにあわててるんだろう？」

「彼女に会うんじゃないか？」

「え?!だって曖昧だって・・・」

「ん?シュンからなんか話し聞いたのか？」

「ううん。」

「俺の部屋来るか?涼子にお祝いして貰わないとだしな。そのときゆっくりはなしてやるよ。」

「うん」

聡の車に乗って部屋に向かった・・・。

第29話

聡の部屋に着くと懐かしい匂いがしてきた。

「聡の部屋に来るの久しぶりだね。」

「そうだな。体調どうだ？」

「今日はだいぶ良いよっ」

「そうか。よかった。それよりさあシユンさんのこと・・・」

「ああ彼女のことか？」

「そうそう。もしかして杏と関係ある??」

「あるっていうか、あいつの彼女モデルやってるんだ。今じゃトップモデルってくらい世界で活躍しててさ」

「だからあんまり会えないのか」

「ああ。あいつは彼女に自分より必要とするやつが出来たら身を引くからちゃんと言えっていった。でも彼女は暇さえ出来ればシユンにラブコールしてくるわけさ」

「そーなんだあ。だから曖昧に答えたんだ。」

「あいついっつも彼女いるかって聞かれると曖昧にすんだよ」

「そんなの・・・」

「あいつもホントはハッキリ言いたいんだと思うんだけどな。」

「だったらハッキリ言うべきだよ彼女のためにも」

「おいおいお前がそんなにムキにならなくてもいいだろう」

「そっか。」

「まあ、今日会えるならなんか進展あるだろ」

「そうだね。そーだっ！お祝いだったね今日は」

「ああそうだ！」

「聡、おめでとう」

「ありがとう。」

コンビニでジュースと小さいケーキを買い、ささやかにお祝いをした。

そして、私は家まで送ってもらった。

部屋で一人しているとこれで良かったのかと悩んでしまう。そのまま眠りについた……

1週間後…… 今日待ちに待ったみんなが集まる日。ちよっ

とお洒落をして出かけていった……。そこは高級そうなレストランだった。そして案内された席には紗季が座っていた

「おお紗季早いねえ」

「でしよ〜はりきっちゃったんだ。」

「あたしも。」

「そーいえばね彼ね弁護士めざらしいんだ」

「えっ！じゃあより戻ったの？」

「ううん。仲いい友達って感じかな」

「そっかあ。もうずっと友達なの？」

「どうかな。とりあえずあたしが教師であっちが弁護士になるまでは友達かな」その時、カオルが来た。すっかり落ち着いた感じの雰囲気漂っていた 「みんな久しぶり！」

「おおカオルじゃん」

「カオル、なんか落ち着いたよね」

「そう？もう主婦業も慣れてきたからかな」

「えっ?!」

紗季と私が呆気にとられていると周りがざわざわし始めた。するとセレブな雰囲気な人が歩いてくる……

ドレスアップした杏だった今度は3人で呆気にとられていた

「みんな揃ってるじゃん」

「杏?!」

「久しぶりー!」

そして、ひとりずつ報告することにした。

第30話（前書き）

今まで読んでくださってありがとうございます。

最終回です！

第30話

まず紗季から・

「えっと、何から話したらいいかな・・とりあえず私、教師目指してる。彼氏とは別れたっていうか距離置いてるってかんじかな。」

カオルが口を開いた

「教師かぁ・なんか紗季らしいね。」

「そう？ありがと。じゃあ次はカオル」

「私？ん・私は学校やめてからとりあえず働いてたんだけど、誰の子かわかんない子を妊娠しちゃって、でもおろしたくなかった。そんな私を受け入れてくれたのが真斗だったんだ。」私は驚いた。真斗はずっとカオルを思い続けてたらしい。

「真斗ね、自分の子じゃないのに可愛がってくれてるんだ。ほんとに真斗がいてくれてよかった。ってことで今は真斗と2人の子供と幸せに暮らして主婦やってます。」

「カオル、2人も子供いるわりには体型変わってないんですけどお！」

「ほんと？ちょっと太ったんだよ。でも運動いっぱいしてるからね。じゃ次は杏！」

「ええ！あたし最後なの？！」「涼子は最後って決まってるの。」

「まあまあ涼子は待ってなよ。私がハードルあげて順番回すからさ」そういつて杏は話し始めた

「私は・・とりえず海外行って売り込んで自分のブランド立ち上げたんだ。今度お店も増えるし。日本に店出すって話も出てるんだけどとりあえず今度オープンする店のことで精一杯だからいつになるか。」

私は我慢しきれなくなって杏に質問した

「ダーリンとはどうなの？」「ああ、仕事もだいぶ安定してきたから、今度ジョンの実家に行こうと思ってる。」

「杏、雑誌とかでよく見るようになったよねえ」

「え！カオルも見たの？」

「涼子も？」

「うん！！すごいよねえ。感動しちゃったよ」

「まあまあ次は涼子の番だから。」

「あっ！そっか。私は、聡と結婚することになりました。んでその前に今、おなかに赤ちゃんいるんで・・・」 「涼子、妊娠中？！おめでとお！育児のことならこのカオル様に何でも聞いて！」

「自分で様って・・・まあ色々教えて下さいよっ！先輩。」

その後、みんなで思い出話をたくさんして語り合った。そしてまた集まる約束をしてそれぞれ帰っていった。

懐かしい時間はあっという間に終わってしまふ。

また前進するために道を歩いていかなければならない。みんなで思い出話をする時間は本当に夢のような時間：その時間が終わってしまう時、現実に戻らなきゃいけない。でも現実を恐れる必要なんて無いだろう。現実にもみんなは居るから。そしてそれぞれの現実には立ち向かっているはずだ。夢を追い掛ける紗季。夢を実現した杏。愛する人と家族という大きな存在を持ったカオル。みんなそれぞれに輝き、希望に向かって歩いている。だから私も負けずに進んでいける。

そんなことを考えながら家路についた。

そして特別な日を終えて普段の日々戻っていった：

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7871a/>

進むべき道

2010年10月10日01時29分発行